第3回自然環境保全基礎調査

植生調査報告書

（長崎県）

1987

環境庁

長崎県植生調査報告書

目　次

（1）　目　次

（2）　調　査　概　要……1

（3）　調査対象地域図……2

（4）　長崎県の植生の概説……5

（5）　凡　例　解　説……11

　　（付）群落写真……39

（6）　植生調査表……61

（7）　資料リスト……117

（8）　調査担当者名簿……118

（２）【調　査　概　要】

長崎県土４１０２平方キロは、国土地理院の五万分の一地形図では３７枚にまたがる。このうち第二回調査(昭和５４年度)には１８図幅の植生図化をおわり、第三回調査(昭和５８，５９，６０年度)では残りの１９図幅の植生調査と植生図化を行なった。年度別、地域別に図幅名を以下に列記する。

（５８年度）

北松浦・平戸地方	図幅名：唐津、伊万里、二神島、平戸、佐世保、生月、志々伎
対馬の南半分	図幅名：仁位、厳原

（５９年度）

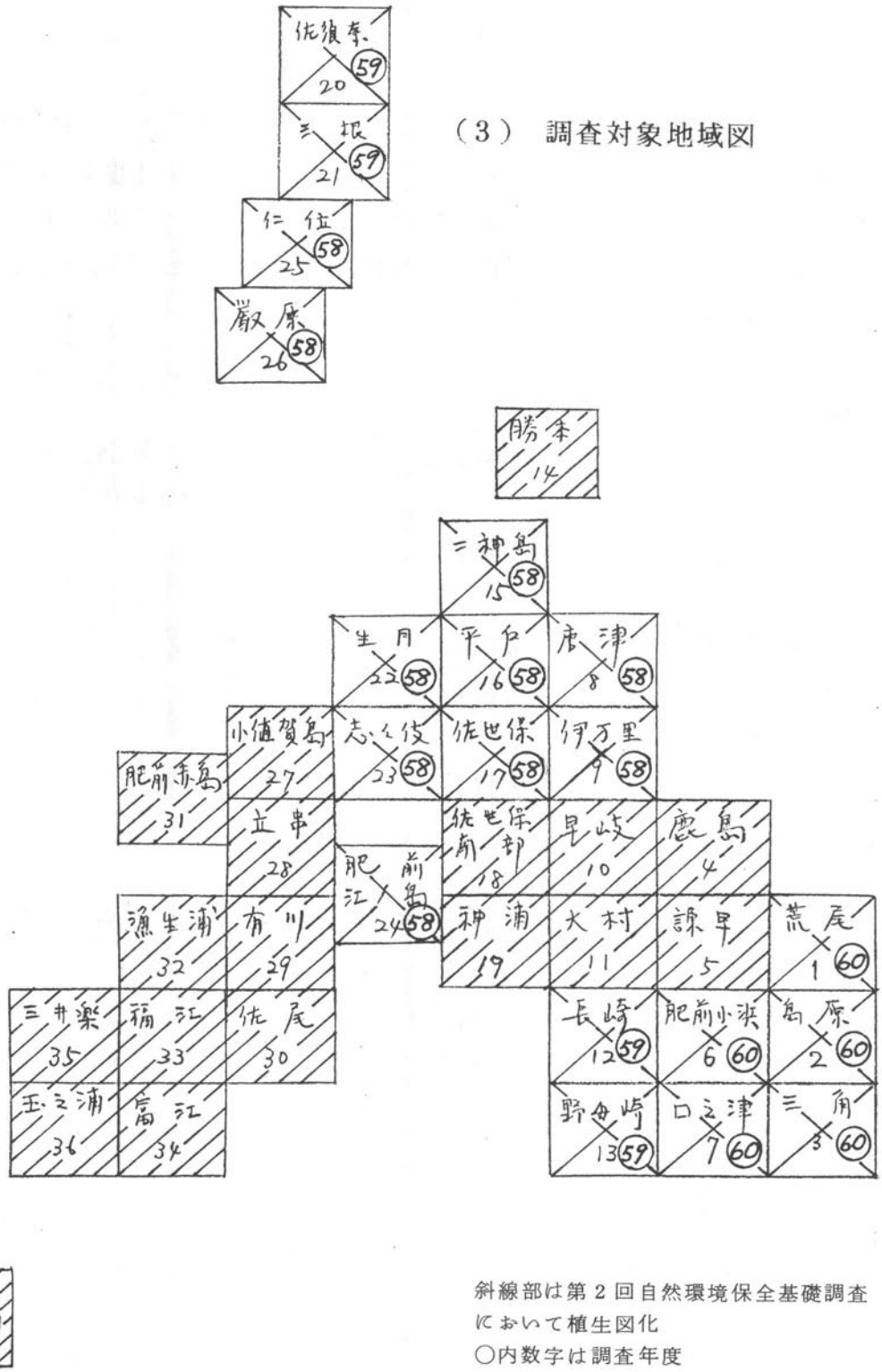
長崎市・野母半島	図幅名：長崎、野母崎
対馬の北半分	図幅名：佐須奈、三根

（６０年度）

島原半島	図幅名：荒尾、島原、三角、肥前小浜、口之津

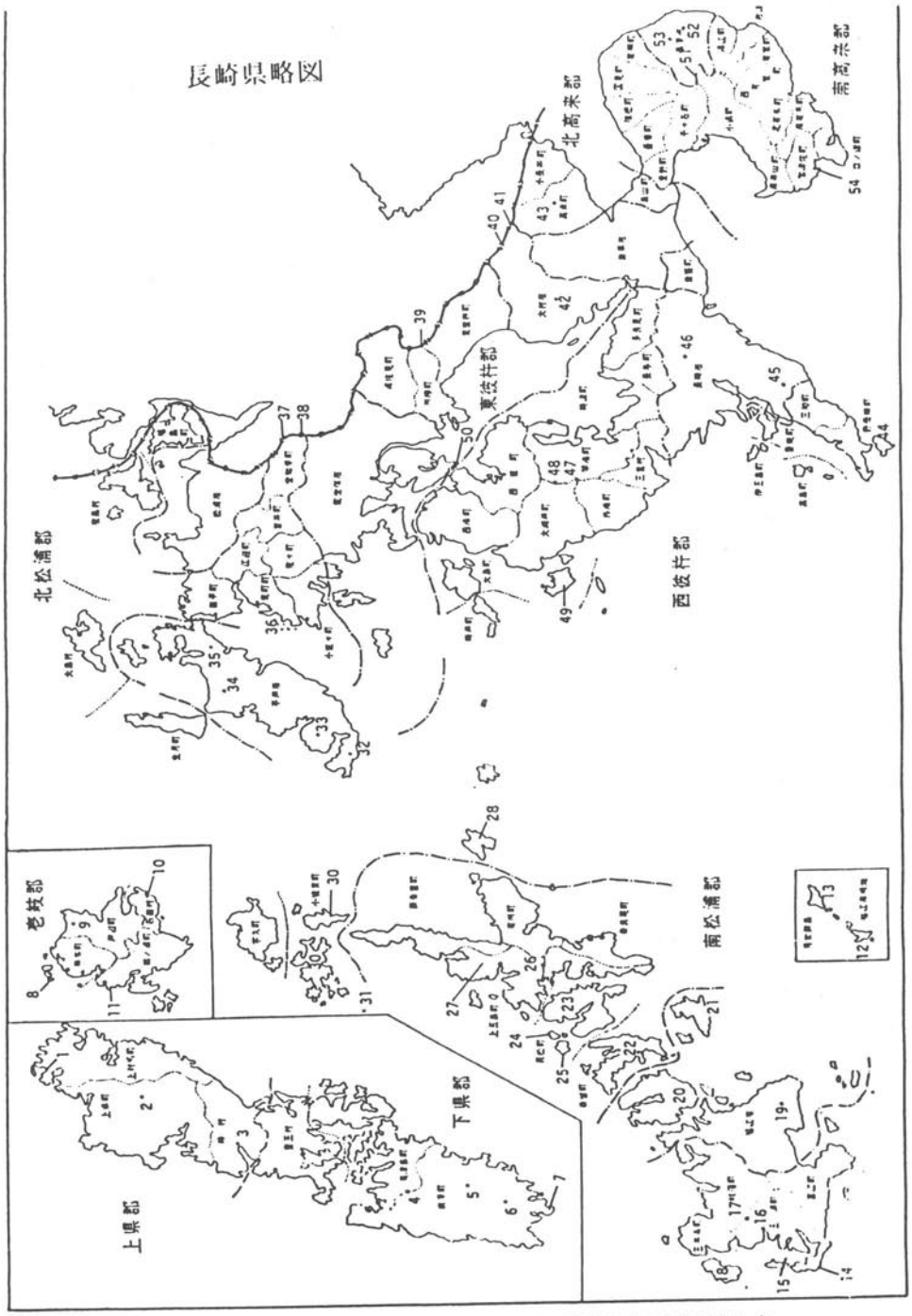
調査は現地での植生調査および植生図化作業、ならびに室内での航空写真の読み取りとそれの現地資料との照合を進めた。第三回の調査対象地域には、以前からの調査資料の蓄積があるので、それを最大限に活用し、また必要に応じて、再度、三度の現地照合を行なった。

（3） 調査対象地域図



斜線部は第２回自然環境保全基礎調査において植生図化

○内数字は調査年度



1～54の番号は，本文中によく出てくる地名あるいは著名な地名を次のように表わす。

1．ワニ浦，2．御岳，3．三根，4百口岳，5．有明山，6．竜良山，7．神崎，8．辰ノ島，9．男岳，10．筒城浜，11．牧崎，12．女島，13．男島，14．大瀬崎，15．王之浦湾，16．荒川，17．じ岳，18．さがノ島，19．鬼岳，20．久賀島，21椛島，22．奈留島，23．若松島，24．日ノ島，25．有福島，26．山王山，27．中通島，28．平島，29．野崎島，30．小値賀島，31．美良島，32．志々伎岳，33．屏風岳，34．安満岳，35．川内峠，36．九十九島，37．国見岳，38八天岳，39．虚空蔵岳，40経ヶ岳，41．乙良岳，42．狸ノ尾，43．轟峡 44．樺島，45．八郎岳，6．軍艦島，47．長浦岳，48．飯盛山，49松島，50西海橋，51．雲仙・普賢岳，52．眉山，53．焼山，54．岩戸山

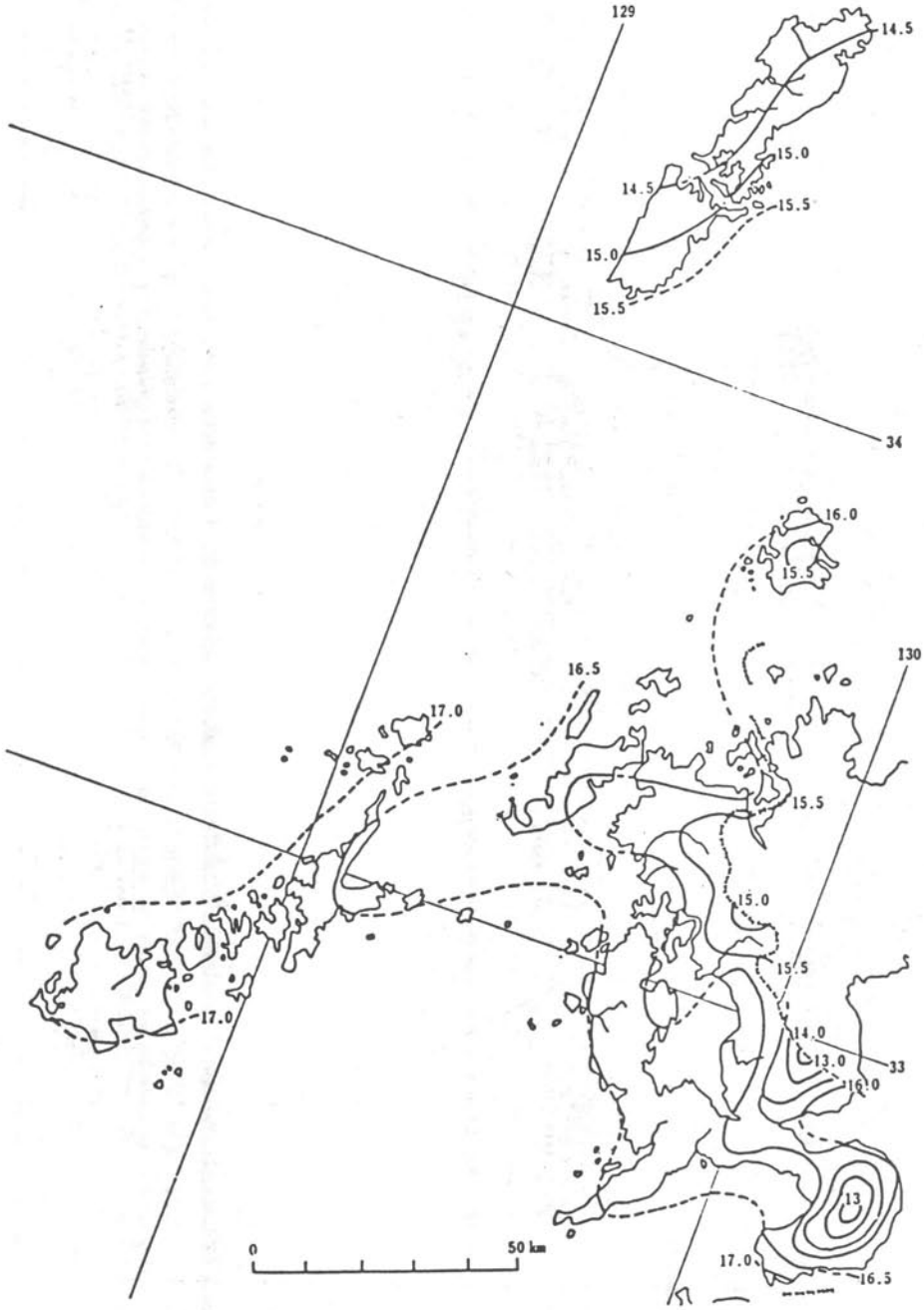


図1　長崎県の平均気温分布図

（4）　【植生概説】

（1）自然的背景

長崎県は沖縄県についで日本の西端に位置する。県土は半島や離島が多くて分散し、全体の東西幅は経度2°17'(東端130°23'－西端128°06')、南北幅は緯度にして2°46'(南端31°58'－北端34°44')の広がりを有する。これは東西200km,南北300kmにほぼ相当し、およそ九州本島の広がりに匹敵する。県土の陸地面積は4,102.26平方キロで、その45%を離島が占めている。この県土は国土地理院の五万分の一地形図37枚に収められていて、そのうち海面の入っていない図幅は無い。それほど長崎県土は肢節に富み、海岸線の総延長は4,000キロに達するといわれる。従って本県では内陸でも海洋の影響下にあって、寒暖の差は小さく穏やかであり、海からの水分の供給により海抜400mを越す山地には雲霧帯が形成される。また丘陵は直接海に臨み、平野の規模は小さく、しかも乏しい。いっぽう高海抜の山地は少なく、千米を越す山地は雲仙と多良山系に限られる。

長崎県の気候は対馬海流の影響下にあって、気温の較差が小さく総じて温暖である。年平均気温の分布を見ると、東支那海に浮かぶ男女群島と五島列島はとくに温暖で、年平均16.5°C以上に達し、男女群島では17.6°Cである。九州本島部でも年平均気温は15.5°Cを下回らない。しかし対馬では北からの海流の影響もあり、15.5°C以下でその北部では14°Cに近くなる。県下でもっとも寒冷な地域は雲仙と多良の山頂部である。雲仙の気象観測資料(海抜850m)によると年平均気温は約11°Cであり、両山地の上部には夏緑林が発達し、冬季には霧氷を生ずる。

(2)植　生　帯

低地から山地にかけての植生帯の分化は、基本的には海抜100mごとに0.5～0.6°Cの率で温度が低下することに原因する。長崎県では、低地は照葉樹林域に、雲仙と多良の上部は夏緑林域に

属していて、両域の境界は９５０～１０００m付近にある。

照葉樹林域は低地・丘陵のシイ林域と山地のアカガシ林域に分けることができる。両者の境界は、平戸以南では４５０m、対馬では３５０m付近である。このアカガシ林域は長崎県では雲霧帯に相当する。

図２は長崎県の南北断面を模式的に示している。太線が本土側、細線が離島を示す。

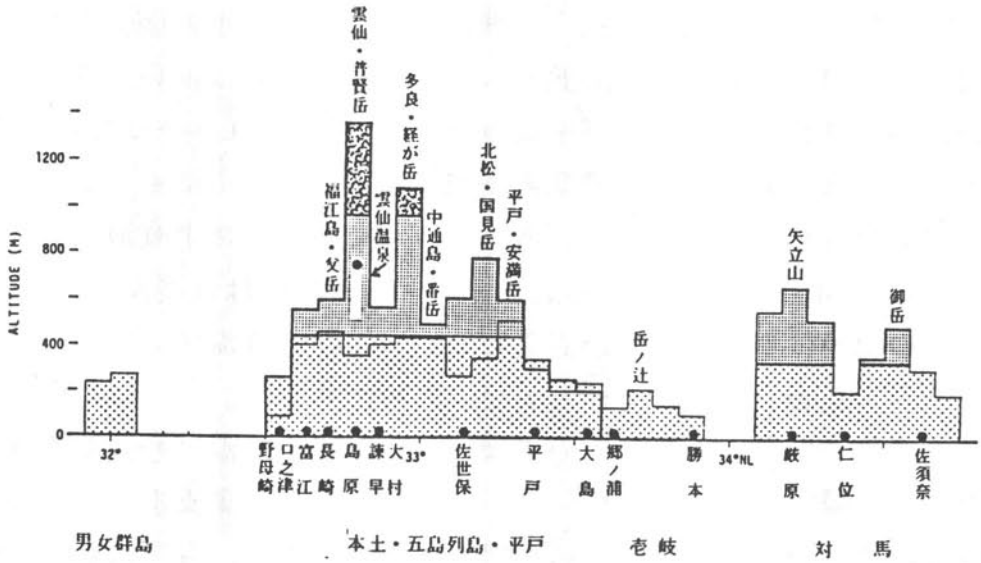


図２　長崎県南北断面模式図，太線は本土，細線は離島を示す

（３）地域の植生概説

長崎県では、地理的気候的な背景と植生帯の分化の状況から、県土を３つの地域に分けることができる。男女群島と五島列島、県本土と平戸・壱岐、対馬の３大地域である。

Ａ）　男女群島・五島列島

この地域の特色は、温暖な気候を反映して暖地系の植物を多く生じ、植物群落にも鹿児島県と共通するところがある。マルバニッケイ群落は男女群島が分布北限地であり、モクタチバナ群落やコウライシバ群落は同群島を経て五島列島まで北上分布している。タブームサシアブミ群集は男女群島ではスダシイを欠くが、五島列島ではタブ、スダシイ、ホルトノキのいずれかが優占する。その残存林分も県下では五島にもっとも多い。内陸の照葉樹林であるスダシイーミミズバイ群集は福江島の中心部で一例の記録があるが、島面積が小さいために内陸の植物群落の発達は十分ではない。またそれらの代償群落であるタブ萌芽林、シイ萌芽林は広く丘陵に発達する。二次林としてのアカマツ群落やコナラ群落はきわめて稀である。

五島列島では海抜４００mを越す山地は６座しかない。４５０m以上が雲霧帯にあたるので、九州本島ではそこに発達するアカガシーミヤマシキミ群集がここには認められない。わずかにアカガシ優占林が限られた山頂部に見出だされるに過ぎない。植林は丘陵部、山地部に広く進められている。

草原は採草地ではススキーメカルカヤ群集、放牧地ではシバーツボクサ群集である。前者は福江島の鬼岳、後者は小値賀島・宇久島の海に臨む丘陵や低地に発達している。

男女群島および五島列島の海岸線は、総じて丘陵が急傾斜をなして海に臨み、平地が少ない。場所によっては断崖をなして海に落ち込む。こうした海岸崖地にはダルマギクーホソバワダン群集が広く発達する。また壱岐、対馬に多いハイビャクシン群落は五島では一個所(美良島)だけに知られる。

玉之浦湾や若松瀬戸のような沈降性海岸では、海に臨む斜面はほとんど満潮線近くまで木本群落に被われ、ここでは海岸低木群落(ハマビワーオニヤブソテツ群集、マサキートベラ群集)に変わってシイ・カシ萌芽林が下降する。その入り江の奥はとくに波静かで、そこの満潮線付近には半マングローブ植物であるハマジンチョウが生育する。本種は東南アジアから北上分布し、五島の玉之浦湾と若松

瀬戸で爆発的に生育量が増える。同様な立地にはハマボウ群落も発達する。草本性の塩沼地群落は規模が小さいが各地の河口に見られる。砂丘植物群落は地形的な制約もあって、福江島西側、宇久島北部以外には見るべきものはない。

B） 本島部・平戸・壱岐

この地域には、九州本島部、平戸島と近隣の生月島、度島、大島、鷹島、福島、壱岐島が含まれる。海岸低木林はハマビワーオニヤブソテツ群集が主体であるが、これに介在して西彼杵半島と野母崎半島ではモクタチバナ群落が見られる。しかし大村湾や諫早湾など内海の海岸にはこれらは発達せず、シイ林が海岸まで下降している。島原半島や五島灘に面した地域では、低地にはわずかながらタブームサシアブミ群集の残存林が見出だされる。しかし北に向かってはその標徴種を一種ずつ失いながら壱岐にまで及ぶ。内陸の低地や丘陵の自然林はスダシイーミミズバイ群集である。各地の神社林にそれを見ることができる。しかし丘陵上部に向かっては次第に標徴種をうしない、スダシイーヤブコウジ群集に代わる。多良山系の周辺にはイチイガシの単木が残っていて、かつてはイチイガシの森林があったことをうかがわせる。自然残存林分としては大村市にイチイガシ群集がある。

以上の森林の代償群落としては、シイ・カシ萌芽林がもっともひろく発達し、アカマツ群落やコナラ群落は極めて小面積である。このことからもこの地域の温暖性がよく分かる。平戸から北松浦地方、壱岐にかけてはマテバシイ萌芽林がシイ・カシ萌芽林に並んで広い。これはかつて藩政時代にマテバシイのドングリを埋めこんで育成した結果であり、天然生のマテバシイ林では無い。しかし現在ではこの地方の自然環境によく適合して広く発達している。

海抜４５０m以上が雲霧帯に当たり、そこにはアカガシーミヤマシキミ群集が成立する。このアカガシ林域にもっとも広く発達する二次林はアカガシ萌芽林である。この林域の上限は海抜９５０～１０００mに及ぶが、雲仙と多良岳では上限付近にモミーシキミ群集

が成立する。壱岐にはアカガシ林域に達する山地はない。

海抜９５０mを越すと夏緑林域に入る。長崎県下では雲仙(最高海抜は普賢岳１３６０m)と多良(同、経ヵ岳１０７６m)にのみ夏緑林がある。その面積は狭く、かつ両山地ともに火山地帯で近隣地方の夏緑林域に達する山地から遠く孤立していて夏緑林の発達は極めて貧弱である。夏緑林の代表であるブナ群落(ブナーシラキ群集)は雲仙の一地点に見られるに過ぎない。夏緑林の殆どはコハウチワカエデーケクロモジ群落で、その組成はブナーシラキ群集からブナとシラキが欠けた形である。夏緑林域の先駆性の低木群落としてはニシキウツギ群落が乾湿両方の立地に成立する。

雲仙には地獄と称される硫気孔があり、その周辺には火山ガス耐性の植物が見られる。硫気孔から遠ざかるに従って、ツクシテンツキ、ススキ、ミヤマキリシマ、シロドウダン、アカマツの群落が帯状に並ぶ。

二次草原は放牧や草刈りの習慣が失われて行くにつれて、衰退してきている。主な草原は、東彼の大野原、佐世保の烏帽子岳、北松の吹上高原、平戸の川内峠にはススキ草原、雲仙の田代原、壱岐の左京鼻、牧崎、小牧崎などにシバ草原がある。

地形制約的な群落にイワシデ群落がある。凝灰角れき岩の露岩地は特殊な立地をなし、大陸系のイワシデ、ダンギク、岩上生のイワヒバ、キハギ、マルバハギ、イワガサまたはイブキシモツケ、セッコクなどを生ずる特殊な群落が形成される。平戸、西彼杵半島、長崎市周辺、島原半島南部の岩戸山などにはこうした岩角地群落が発達している。

外洋に面した海岸崖地の群落はダルマギクを持つあるいはそれを欠く草本群落が各地にみられる。いっぽう有明海や大村湾など内海ではむしろ塩沼地の群落が小規模ながら各地にある。シオクグ、ハマサジ、ハママツナ、ナガミノオニシバなどが主な植物で、ときにシバナも見られる。砂丘の発達は良くないので大規模の砂丘植生はないが、島原半島の野田浜、野母半島の脇岬、平戸の千里浜が例に

挙げられる。

C） 対　馬

対馬は長崎県のみならず九州全体から見ても、特異な地域である。その第一は、九州にあっては北に偏して位置していてリマン海流の影響をうけ、このため対馬北部には北方系の植物が生じ、また森林群落の組成は対馬を北に向かうほど減じてくることによく表れている。第二に、対馬はかつて日本ー朝鮮半島の陸橋の一部をなしていて、大陸系の植物を岩角地などに多く産することである。

対馬では陸地斜面は直接に海に臨む地形をなすので、平野は少ない。海岸斜面にはハマビワーオニヤブソテツ群集やマサキートベラ群集が広く発達する。対馬上島と下島の間にはさまれた浅茅湾では、波浪の影響はすくなくてシイ林は直接海岸線まで下降する。低海抜地の自然林はスダシイーホソバカナワラビ群集で、とくに下島の各地の神社林によく残っている。神崎、竜良山、唐洲、木坂の残存林は代表例である。スダシイーホソバカナワラビ群集は内陸側でスダシイーヤブコウジ群集、イスノキーウラジロガシ群集に接する。これらの自然林の代償群落は、下島ではシイ・カシ萌芽林、上島ではコナラーノグルミ群集である。後者の領域のなかで上島北端ではヒトツバタゴ群落を見る。

対馬では海抜３５０m以上はアカガシ林域に入る。そこではアカガシーミヤマシキミ群集が発達する。竜良山、白岳に残存林がある。二次林としてはアカガシ萌芽林が成立する。この林域の上部にはモミーシキミ群集が成立し、とくに上島の御岳の残存林は広い。

対馬の植生上の特色は、岩角地の群落によく現れる。白岳の頂上の石英斑岩の露岩地には、イワシデ、ダンギク、チョウセンヤマツツジなど大陸系植物を多く生ずる岩角地群落を見る。

各地の海岸崖地にはホソバワダンーダルマギク群集、また上島の北と東側の海岸にハイビャクシン群落の発達をみる。そのほか、コウボウムギ、スナビキソウ、ハマゴウ、ハクウンキスゲなどの海岸群落は、とくに美津島町の黒島に集中して発達する。